

2021/1/31-2

掌編小説「子、親を選べず」終章



真之介君自身もそうですが、いなくなつたお母さんも近所の人たちも、真之介君のお父さんの事を何となく下に見ている様な処があります。

いつも何かを探してキョロキョロ落ち着きがなく歩いているせいか、声が大きく見てくれない余り知的とは言えない風体のせいか、将又その道のお兄さん方も顔負けの強面（こわもて）のせいなのかは分かりませんが、軽んじるといふより何となく皆避けているみたいです。

なのに、不思議なのは暫く見かけず忘れてしていると、無理難題程面白がるお父さんは知らぬ間に何かを身につけていたりするのです。

お母さんは料理が出来ない事でお父さんを馬鹿にしておりましたが、いつの間にか料理が出来る様になっていましたし、真之介君自身もお母さんのそんな見方の影響からか、特にこれといった事もないのにお父さんを少し軽んじている処がありました。

ところが最近、知らないうちにお父さんには多くの外国人の友達が出来ていて、傍で聞いているとそれなりにそう聞こえるその国の言葉を話したりしていました。

あと、真之介君自身もつと驚いたのは、大人にせよ子供にせよ、日本人は殆ど誰も見向きもしないお父さんなのですが、その強面にも拘わらず外国の人達は、大人にせよ子供にせよ、むしろ興味深そうに近寄ってきて、知らないうちに親しげに話していたり、犬とか鳥とかが、何故か好物の匂いにも誘われた様に近寄って来たりする事でした。

さらにはこの住宅街ではそんな事はないのですが、下町の商店街なんかに行くと、お父さんは真之介君と同一年くらいの子供達と気づかないうちに仲良くなっていて、それを見ると同年代のプライドからか、真之介君は「大人風情に自分の領分を侵された」様な悔しさを覚えたりもしました。

そうして

「普通子供の方がお気楽で大人の方が難しい顔をしておのに、なんで家とこだけ、反対になつとう？」

しかしよくよく思い出ししてみると、他の子の家は友達の子供も親の大人も何となく「皆大人みたいに知らん顔をしている」事に気づきました。

「やっぱし、おとんだけが変なんやあ」

真之介君はまたまた「他の家の子に産まれればよかったなあ」

と思いました。

「でも、子は親を選んで産まれて来られん、て、誰か言うてはったしなあ。辛いモンがあるわなあ」

ですがお父さん似で、諦めの悪い「理屈っぽ」の真之介君は、そこから更に考え

「子が親を選べんねえやったら、ああここに産れてきて良かったなあと最期に思える様な親に、親自身がなつていてもらわんと、困るやないの、お子達が」

と結論づけました。

で、その日真之介君はお父さんに言いました。

「うちだけ皆と、違ごてるから自分結構苦労しとんねえやあ。外で。ちつとは子の事も考えてくれなあ」

するとお父さんはこう答えました。

「さよかあ。ええこつちやないかい。苦労はなんぼでもせえや。そのうち大きな実がなるさか。苦労を楽しんで来」